

### 附録3 検索キーの有効性に関する実験

書誌同定におけるフルタイトルキーの有効性を測定するため、目録カード中のデータを利用し総合目録データベースを検索するという実験を行った。

#### 1. 検索データ

京都大学附属図書館の書架目録カードから、100件の検索データを作成した。内容的には、1970年台の言語学関係の和図書である。

#### 2. 検索方法及び結果

同一の目録カードについて、以下の8通りの検索キーを作成し実行した。

検索方法	1件ヒット	2件ヒット	ヒットせず
(a)フルタイトルキー(FTKEY)のみによる検索	57	41	2
(b)FTKEYと出版年(YEARKEY)のAND検索	87	4	9
(c)FTKEYと出版者(PUBKEY)のAND検索	73	20	7
(d)FTKEYと第一著者の姓(AUTHKEY)のAND検索	75	22	3
(e)FTKEYとYEARKEYとPUBKEYのAND検索	85	2	13
(f)FTKEYとPUBKEYとAUTHKEYのAND検索	72	20	8
(g)FTKEYとAUTHKEYとYEARKEYのAND検索	88	2	10
(h)FTKEYとYEARKEYとPUBKEYとAUTHKEYのAND検索	84	2	14

#### 3. 分析

(1)1件ヒットの場合、全て正しい書誌にヒットしていた。

(2)ヒットしない原因は、以下の通りであった。

- (a) 2件とも検索データの入力ミス(この2件は、全ての検索方法でヒットしなかった)
- (b) (a)の2件以外のエラーは次の通り。5件は手書きカードで出版年が刷年で記載されていたため、残りの2件は検索値の入力ミス。
- (c) (a)の2件以外のエラーは次の通り。4件は、DB上の出版者表記と検索値の表記が異なることによる(大修館書店 大修館、有精堂 有精堂出版、紀伊国屋書店 紀伊國屋書店：前者が検索値)。1件は、出版者がDB上にそもそも存在しない書誌であった。
- (d) (a)の2件以外のエラーは次の通り。検索値の入力ミスが1件。
- (e)~(h)は、上記(a)~(d)のエラーの組み合わせによる件数となっている。

#### 4. 結論

- (1)フルタイトルキーだけでは、あまり有効ではなかった((a)の1件ヒットは57%)。
- (2)フルタイトルキーと組み合わせるキーワードとしては、出版年が一番有効であった((b)の1件ヒットは87%)。ただし、元となるデータが刷年を採用している場合は、有効性が大きく落ちるものと考えられる((b)のヒットせず9件のうち、5件がこの原因による)。

- (3) 出版者と組み合わせる場合は、出版者の検索形は完全な形を指定するより、前方一致で検索した方が有効と思われる（(c)のヒットせずのうち、4件はこの処置で救える）。
- (4) 今回使用したデータは、66冊までが翻訳書であった。この場合、カード上に著者の原綴があったので、有効な検索ができた。また、フルタイトルキーを組み合わせる場合は、姓のみで十分であると考えられる（(d)の1件ヒットは75%）。
- (5) 多くの種類の項目を組み合わせても、効果は得られなかった。これは、各項目での失敗が積み重なるためである（(e)～(h)の1件ヒット率は特段高くない）。また、実測しなかったが、項目を増やした場合は検索速度が遅くなったようである。

今回の実験結果から、次のような検索キーの選択が有効であろうと推測する。

- ・ カードの出版年が版年なら、「フルタイトルキー + 出版年」
- ・ カードの出版年が版年でない場合、外国人著者の綴がカードでわかるなら、「フルタイトルキー + 第一著者の姓(ただし外国人は原綴)」
- ・ それ以外は、「フルタイトルキー + 出版者名の前方一致」

今回の実験は、内容的に（年代・分野）限定された範囲の資料群で実施したものである。その意味で、今回の結論があらゆる資料群に適用できるとはいえないが、一事例として各図書館でのCATP-Autoの運用の参考にしていただきたい。